HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	近代日本における拓殖教育の展開と「植民者」像 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	大熊, 智之
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12505号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/65737
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Tomoyuki_Ohkuma_review.pdf (審査の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：大熊　智之

	主査	教授	権　錫永
審査委員	副査	教授	村田　勝幸
	副査	教授	白木沢旭児

学位論文題名
近代日本における拓殖教育の展開と「植民者」像

本論文は、日本の拓殖教育の歴史を描きつつ、同時に、その教育の場における理想的な植民者像がどのようなものだったのか、を明らかにすることを目指す。

日本帝国主義史研究では、「植民」は国家的な営みであり、「植民者」は「植民される客体」にすぎないとみなされてきた。そのため、従来、入植後の植民者をめぐる研究が隆盛だったのに対し、内地を発つ前の植民者への関心は希薄であった。帝国主義史研究の流れに移民史研究の視角が加わることで、手薄ながら、植民地へ移動する主体に焦点を当てた研究が現れたが、本論文はその数少ない研究の流れを汲むものである。とりわけ、拓殖教育の場に着目して移動する主体の問題に迫る。

近代日本人の日本列島を越えた移動は、一般的に植民地への移住＝「植民」と自国の領土外への移住＝「移民」に大別される。かつて植民政策学において、新渡戸稲造は「植民」とは植民地を前提とする民族発展のための政策だと定義した。それに対し、矢内原忠雄は、「植民」は「社会群が新たなる地域に移住して社会的経済的に活動する現象」と再定義し、そこにまつわる国家の縛りや空間的な制約を取り払おうとした。申請者は矢内原の定義に注目することで、いわゆる「植民」と「移民」の垣根を取り払って、各方面への移植民の相互関係を考慮するという着眼を得た。実際に植民者の育成をめぐる議論や教育の現場では、この区別があいまいなものであり、むしろ接続され、相互に作用を及ぼすものであった。その意味で、この着眼点は本論文全体において極めて有効であると言える。

本論文では「拓殖教育」という包括的な用語を用いるが、それは、移動する人材の養成という問題を全体的に考えるためであり、従来移住先によって区分されてきた領域間の相互関連を問うためでもある。

本論文の当該領域における研究成果は以下の通りである。

本論文は、大枠で見れば、拓殖教育に関する初めての通史として、帝国主義史研究と移民史研究を接近させた研究として、大きく貢献するところがあったと判断される。

具体的には、第一、通史の観点から見て、拓殖教育の前史として、札幌農学校の転換期に現れた植民者養成の意識の萌芽を論じることに始まり、その後拓殖教育論が勃興期を迎え、多種多様な植民学校どうしの競合関係が生まれるまでに至ったこと、さらに、満州移民が国策となった時代に国策から距離を置いて「平和の戦士」という理念を追い求めた海外植民学校の存在、北大の教員たちの拓殖教育における役割に至るまで、拓殖教育の展開とそこに表れる植民者像の変遷を追い、日本の「植民」をめぐる理念の歴史を跡付けたことが評価できる。とくに、北大関係者の拓殖教育への関与について、商業移民養成の系譜と農業移民養成の系譜とが存在し、ほとんどすべての拓殖教育機関への関与が認められることを論じることにより、北海道開拓のための人材養成を担った札幌農学校・北大が、最終的に日本の拓殖教育の大御所と言っていい位置にあったことを浮き彫りにしたことは高く評価できる。

第二、帝国主義史研究と移民史研究の接近という観点から見て、(1)拓殖教育論や教育の場においては、移民と植民の区分が多くの場合に無効であるばかりでなく、相互連関の中にあったことを明らかにしたこと、(2)それにより、本論文が、両研究分野のさらなる接近を促すものとなっていること、この２点に貢献が認められる。

ただ、「拓殖大学」について、学校間の競争関係にも注目して客観的に歴史を記述しようとしながらも、日本全体の学校体系の中での位置づけが弱いという課題も残っている。しかし、この課題は、さらなる研究の発展のために提示されたものであって、上述の研究成果をいささかも損なうものではない。

以上の審査の結果、本審査委員会では、全員一致して、申請者・大熊智之氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。